

中学校放送礼拝（星野晴夫先生） 2018年5月11日（金）

聖書 新約聖書エフェソの信徒への手紙 2章 14節、15節

「実にキリストは私たちの平和であります。二つのものを一つにし、ご自分の肉において敵意と言う隔ての壁を取り壊し、…十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。」

明後日5月13日（日）は母の日です。母の日と言われるものはいくつか起源があるようですが、カーネーションの花と関連して覚えられている母の日は、1908年5月10日、ウェストバージニア州に住んでいたアンナ・ジャービスさんが、3年前に亡くなった母親を追悼する意味で、フィラデルフィアの教会において母親の好きだった白いカーネーションを配ったのが始まりだそうです。彼女が白いカーネーションに込めた思いを考えてみましょう。

アンナの母親アン・ジャービスは牧師夫人でしたが、母親による奉仕団体”Mothers’ day Work Club”を結成して、病気で苦しむ人々の援助募金をしたり、病気予防の公衆衛生の活動など、社会運動を行って活躍していました。

やがて、1861年から65年にかけてアメリカ国内で起きた南北戦争の時には、南軍にも北軍にもつかず中立な立場をとって、兵士の看病を行ったり、互いの敵意をなくすために“Mothers Friendship Day”(母親の友情の日)を企画して、南北双方の兵士や地域の人を招いたイベントを成功させ、平和を願って献身的に働きました。

彼女自身、10人の子どもの内8人を戦争や病気で失い母親としての大きな痛みを経験する中、社会の中で、敵意によって隔てられ争い合うものを、愛によって再び結びつけ、回復することを心から願い、母親や女性でこそ果たしうる役割と責任を真剣に果たそうとした姿がそこにあります。先程開いた聖書の個所にあったように、イエスは十字架の苦しみを通して神と人との間の隔てを取り除いて平和をもたらせてくださいました。彼女もクリスチャンとしてそのことを良く知っていたことでしょう。

アンナさんが、カーネーションを配って人々に伝えたかったのは、単に母親を偲ぶための追悼の思いだけではなく、母親が自身の生涯を通して示してくれた、この社会に平和をもたらす生き方の継承、女性として母親としてのアン・ジャービスの尊い業を受け継いでほしいとの思いであったのではないのでしょうか。